第２章　京都大学医学部構内ＡＬ20区の発掘調査

浜崎一志

１　調査の経過

本調査区は吉田山の西麓，京都大学医学部構内の東南端に位置する(図版１-169)。ここに放射性同位元素総合センター有機廃液処理設備室の新営が計画されたため，新営予定地全域の発掘調査を実施することになった。発掘調査は，1986年12月15日に開始し，1987年１月31日に終了した。調査面積は，331㎡であった。

すでに，本調査区に近接する111・134地点では弥生時代の溝と水路を，74・134地点で中世の土取り穴を，154・155地点で近世の大規模な土取り穴などを検出している(図版１，表４)。本調査区でもこれらと一連の遺跡の存在が予想された。

また，本調査区のすぐ東には『兵範記』などの文献から，鳥羽法皇の皇后高陽院泰子の御願の御堂である福勝院が比定されている〔杉山62，川上77〕。この福勝院には九躰阿弥陀堂，三重塔，寝殿，護摩堂などがあったことは知られているが，寺域の正確な位置や規模はいまだ不明である。

発掘調査を実施した結果，近世初頭の土取り穴を検出した。医学部東北部で検出される中世の土取り穴，および病院構内北半部の近世後半の土取り穴とともに，本調査区一帯の土地利用の変遷を知るうえで貴重な資料となった。また，中世の遺構は土取り穴に攪乱され，検出できなかったものの，密教法具の鋳型や輸入陶磁器をはじめ，12～14世紀の遺物が多量に出土した。密教法具は寺院に関わるものであり，遺物の時期も福勝院の存在時期と一致することから，福勝院となんらかの関わりをもつ遺跡があったと考えられる。

２　層　　位

本調査区の基本層位は，上から表土(第１層)，黒色土(第２層)，黒灰色土(第３層)，不定形土坑埋土(第４層)，黄灰色シルト(第５層)からなっている(図５)。現地表は東北端で標高51.5ｍ，西北端で50.8ｍを測り，東から西へ下がる緩傾斜を呈するが，近世の遺物を含む黒色土と黒灰色土はほぼ水平に堆積しており，現地表面の傾斜は近・現代の盛土によるものと思われる。

不定形土坑は黄灰色シルトを採取した土取り穴であり，茶褐色土，黄色細砂などがブロ

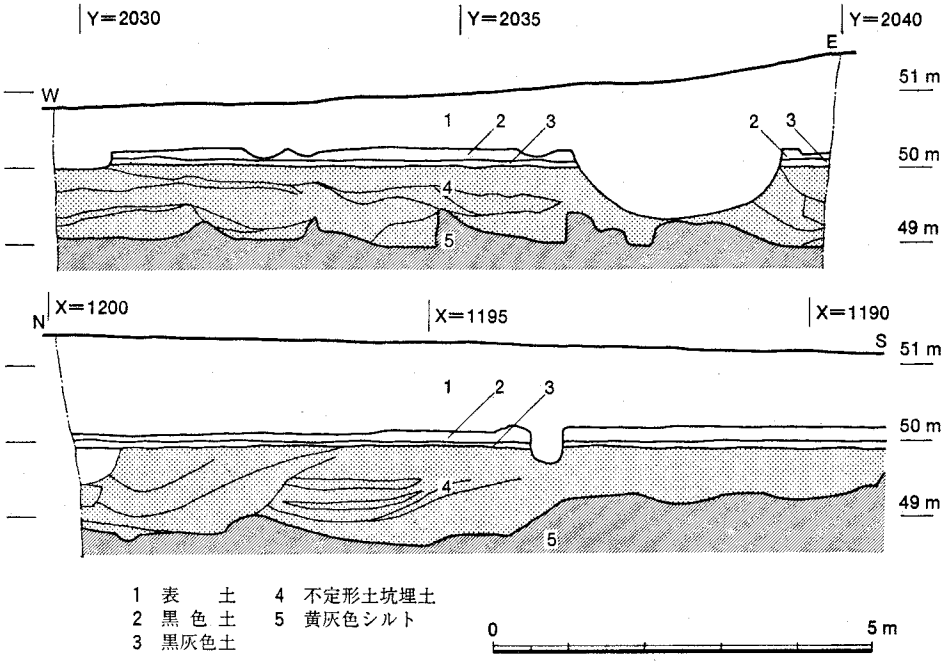

図５　調査区北壁(上)と東壁(下)の層位　縮尺1/100

ック状に埋積している。埋積状況は，74・134地点で検出した土取り穴とよく似た様相を呈する。ブロック状の埋土は全体的な傾向としては西から東へと傾斜しており，土取り穴が掘り進められた方向を知ることができる。土取り穴の埋土は少量の江戸前期の遺物と，多量の中世の遺物を含む。黄灰色シルトを採取するときに，中世の遺跡が攪乱されたと考えられる。

黄灰色シルトは採取の対象となった粘質の土で遺物を含まない。この黄灰色シルトは，134地点の調査で弥生前期末～中期初頭に堆積した黄色砂の下で検出されており，弥生時代以前のものと考えている。

3　遺　　構

本調査区では，江戸後期の溝・柵列・柱穴と，江戸前期の土取り穴を検出した(図版2)。江戸後期の溝は全部で５本検出したがいずれも浅く，畑の耕作用の溝と考えられる。溝はいずれも南北方向のもので，方位は約4～８°東にふる。柱穴は多数検出したが，柵列と認められたのは２列だけであった。柵列は南北方向のもので，その方位は東に約２～３°ふる。柵列の柱間は2.0～2.4ｍを測る。

遺　　構

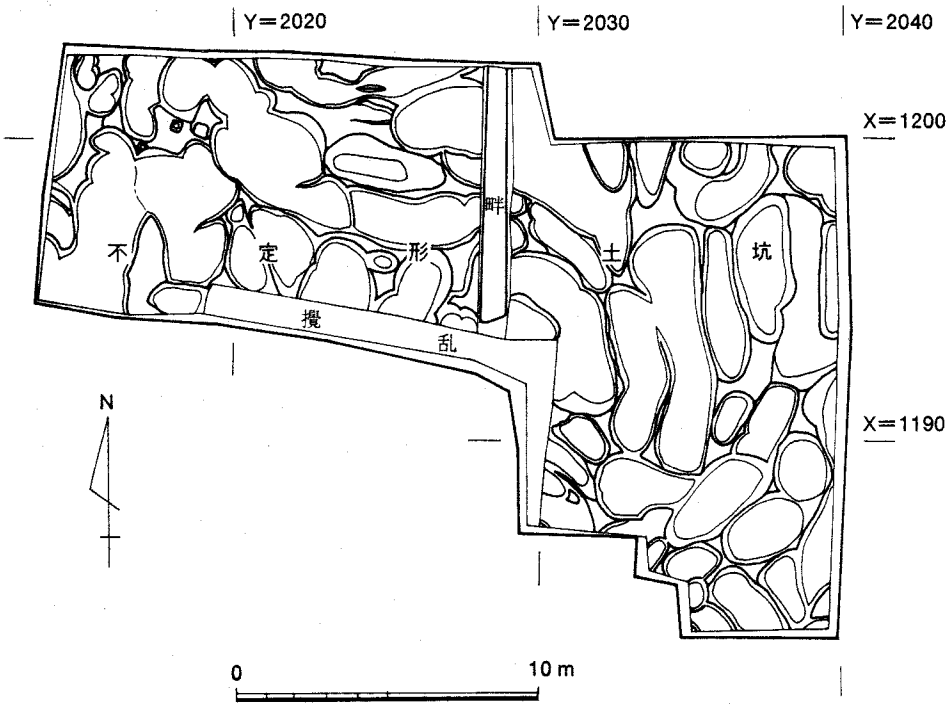

図6　江戸前期の遺構　縮尺1/250

江戸前期の土取り穴は，調査区の全域で検出した(図6)。たがいに大きく切り合うことなく，接するように検出されることや，黄灰色シルト層の下部でとまることから，74・134・154・155地点と同様の土の採取跡と考えられる。本調査区の土取り穴の大きさは1～5㎡と一定せず，154・155地点で検出した18世紀のもののような規格性はなく，形態のうえでは74・134地点の中世の土取り穴に似る。埋土の状況から，土取りは西から東へ，南から北へと掘り進められたことが判明した(図5)。

4　遺　　物

遺物は整理箱に22箱出土した。その大半は江戸前期の土取り穴から出土したものであるが，土を採取するときに中世の遺跡を破壊したものとみられ，出土した遺物のほとんどが平安時代の後期から鎌倉時代にかけての遺物である(図版3～5，図7～9)。

Ⅱ1～Ⅱ3は見込みに圏線をもつ土師器のⅢ。Ⅱ1は口縁部がやや外反し，圏線は浅く口径は11.4cmを測る。Ⅱ2・Ⅱ3はV字形の圏線をもち，口径はそれぞれ11.4cmと11.0cmを測る。Ⅱ4は志野の高台付きのⅢ。見込みに2本の圏線と鉄絵を施す。Ⅱ5は初期伊万

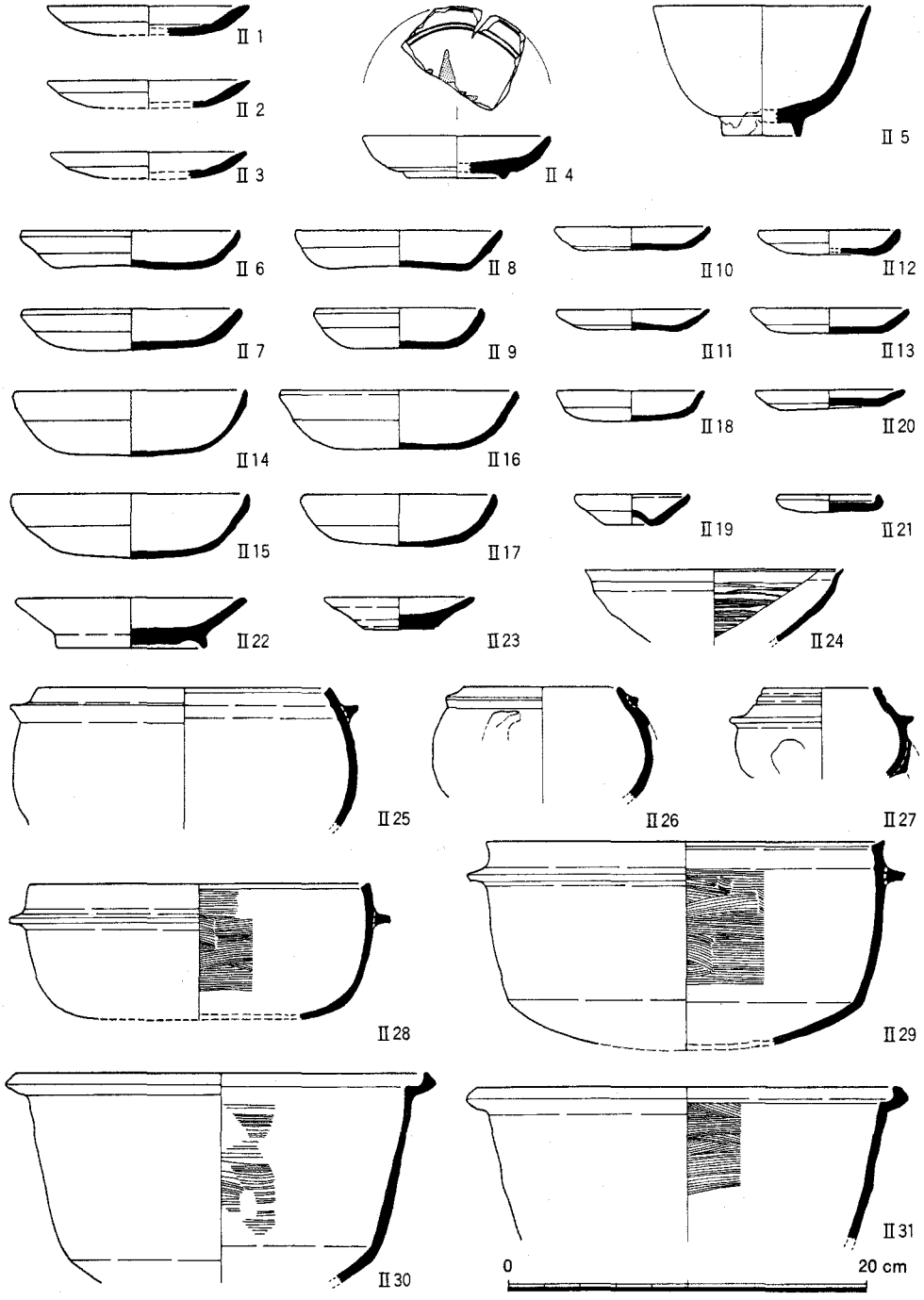

図7　土取り穴出土遺物(1)(Ⅱ1～Ⅱ3・Ⅱ6～Ⅱ23土師器，Ⅱ4陶器，Ⅱ5磁器，Ⅱ24～Ⅱ31瓦器)

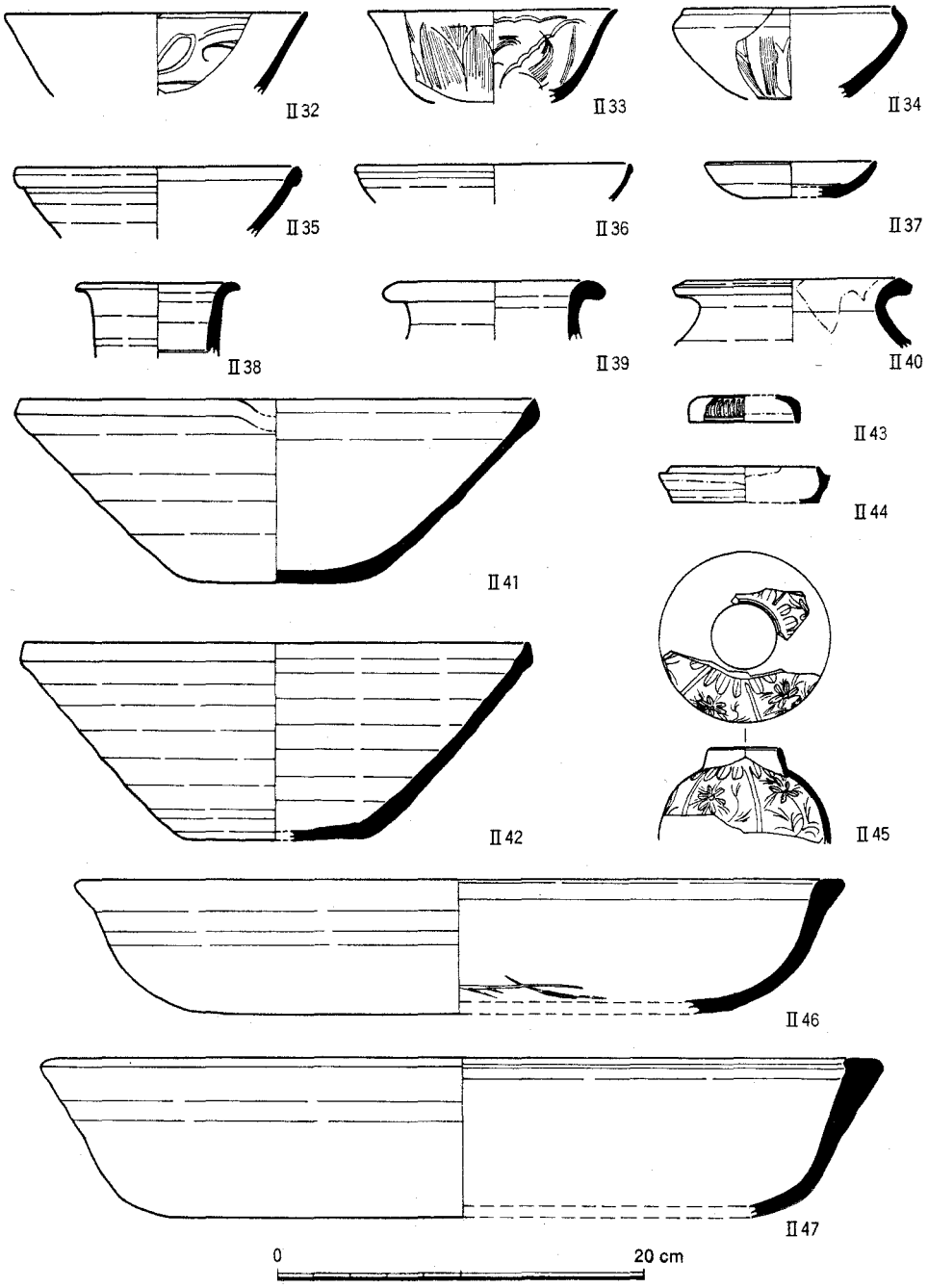

図8　土取り穴出土遺物(2)(Ⅱ32～Ⅱ34青磁，Ⅱ35～Ⅱ39白磁，Ⅱ40褐釉陶器，Ⅱ41・Ⅱ42須恵器，Ⅱ43～Ⅱ45青白磁，Ⅱ46・Ⅱ47瓦器)

里の高台無釉の青磁椀。器壁はやや厚く，器高は高い。Ⅱ１～Ⅱ５は17世紀後半の資料で，土取り穴が埋め戻された時期のものと考えている。

Ⅱ６～Ⅱ23は土師器の椀と皿。Ⅱ６・Ⅱ７は１段撫で面取り手法D_5類の大型の皿で，口径はいずれも12.5cmを測る。Ⅱ８は１段撫で素縁E_1類の大型の皿で，底の一部に板圧痕を残す。Ⅱ９は１段撫で面取り手法D_5類の皿。Ⅱ10～Ⅱ13は１段撫で素縁E_1類の小型の皿で，口径は8.2～8.4cmを測る。Ⅱ14～Ⅱ17は１段撫で素縁手法E_1類の椀で，Ⅱ14～Ⅱ16の口径は13.2～13.4cmを測る。Ⅱ18・Ⅱ20は１段撫で素縁E_2類の小型の皿で，灰白色を呈し，口径はそれぞれ8.3cmと8.9cmを測る。Ⅱ19は１段撫で素縁E_2類の凹み底小椀。Ⅱ21は土師器受け皿。灰白色を呈し，口縁端部のかえりはあまく，口径も6.0cmと小さい。Ⅱ22は高台付き土師器皿。高台は後から貼付けたもので，底部には糸切り痕を残す。Ⅱ23は底部に糸切り痕を残す土師器皿。

Ⅱ24は内面に暗文を施した瓦器の椀。口縁端部で外反する。Ⅱ25～Ⅱ29は瓦器の羽釜。Ⅱ25～Ⅱ27は胴部が球形をなし，Ⅱ28・Ⅱ29は直線的である。Ⅱ25の口縁端部は横撫でによる内傾した面をもつ。口縁端部内面直下には横撫でによる凹線を施す。Ⅱ26・Ⅱ27は三脚をもつ小型の羽釜。Ⅱ26は鍔直下に脚の痕跡を残し，外面に煤が付着する。Ⅱ27は鍔からやや下がったところに脚がつく。口縁部外面下端には２条の凹線がめぐる。Ⅱ28・Ⅱ29は大型の羽釜で口縁端部にやや内傾する面をもち，内面は刷毛目調整である。Ⅱ30・Ⅱ31は瓦器鍋。蓋受け部分の屈曲はあまく，やや新しい傾向を示す。

Ⅱ32～Ⅱ34は青磁の椀。Ⅱ32は内面に片切り彫りによる劃花文を施す。Ⅱ33は外面に蓮弁文と櫛描文を施し，内面に片切り彫りによる劃花文と櫛描文を施す。Ⅱ34は口縁部が強く内湾する椀で，外面に蓮弁文と櫛描文を施し，内面は無文である。Ⅱ35・Ⅱ36は白磁の椀。Ⅱ35は玉縁が大きく器壁が厚い。Ⅱ36は玉縁が小さく器壁が薄い。Ⅱ37は白磁の皿で，見込みに圏線がめぐり，底部は露胎である。Ⅱ38・Ⅱ39は白磁の壺の口頸部。Ⅱ38は口縁部が外折し，Ⅱ39は口縁端部が丸く肥厚する。Ⅱ40は褐釉陶器四耳壷の口頸部。

Ⅱ43・Ⅱ44は青白磁合子の蓋と身。Ⅱ44は断面が箱形を呈する合子の身で，蓋受けと底部は露胎である。Ⅱ45は青白磁の水注。２本の縦線で外面を六分割し，間に陽刻の花文を施す。頸部には蓮弁文を飾る。注ぎ口の痕跡はあるが，その形状は不明である。

Ⅱ41・Ⅱ42は須恵器のすり鉢。Ⅱ46・Ⅱ47は瓦器の盤。いずれも底部に籾圧痕を残す。Ⅱ46は見込みにまばらな暗文を施す。Ⅱ47は口縁端部がするどく内にはりだす。Ⅱ６～Ⅱ47は12～14世紀の資料である。

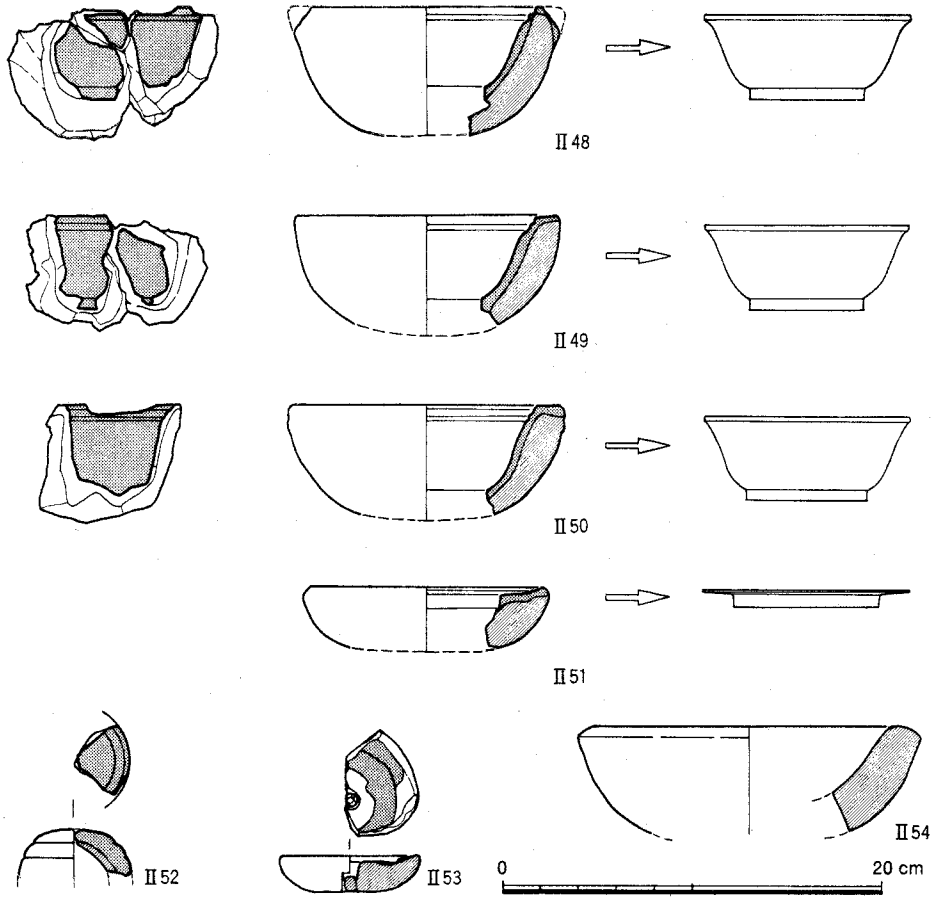

図9　土取り穴出土の鋳型と取瓶，完成品想定図

このほか，鋳型，取瓶の破片が炭や灰とともに，土取り穴の埋土からまとまって出土した(図9)。Ⅱ48～Ⅱ51は，密教法具のひとつ六器とその台皿の鋳型である。Ⅱ48～Ⅱ50は六器の外型で，いずれも砂(すな)を混ぜた粘土で椀形の粗型(斜線部分)をつくり，焼き締めたあとで，内側を粒子の細かな真土(まね)(梨地部分)で仕上げる。鋳型の口縁部内側には，内型をはめ込んで固定するための幅木受けが彫りくぼめてある。これらの鋳型から鋳造した製品を復原してみると，六器はいずれも口径約11cm，器高約4.5cmを測る。口縁部の外側を垂直に面を取ったもので，仁平3(1153)年の紀年銘をもつ経筒に共伴した花背別所経塚出土の六器(福田寺蔵)のように，鋳造後口縁部を面を取るように削り，「しのぎ」をたてたものと考えられる。全体として器高，高台がともに低い低平な形であり，平安後期の特徴をもつ〔奈良博77〕。土取り穴からは図示したほかにも六器の鋳型の小片が多数出土したが，蓮

弁飾りを施した，いわゆる慈覚大師請来形のものはなく，素文系の法具のみが作られたと考えられる。

Ⅱ51は六器の台皿の外型で，皿形の粗型をつくり，焼き締めた上に真土を塗って仕上げる。六器の鋳型と同様に，口縁部内側に幅木受けを彫る。鋳造された台皿は口径約11cm，器高約１cmを測る偏平な皿である。皿はわずかに内傾する。六器の高台の滑り止めとなる「かえし」の痕跡は不明である。一般に素文の六器と台皿の口径はほぼ同じであるものが多い。Ⅱ51の口径もⅡ48～Ⅱ50とほぼ同じであり，Ⅱ51はⅡ48～Ⅱ50と組みになる台皿の鋳型である可能性が高い。Ⅱ52は３段に段をなす蓋の内型で，火舎香炉の蓋に似るがやや小さい。Ⅱ53は鳥目（とりめ）の痕跡を残す鋳型である。鳥目を中心に引型を回転させ，真土を塗りつけながら回転体状の器形を仕上げたものと思われる。Ⅱ54は半球形の取瓶。表面は平滑で，堅く焼き締められている。

以上のような結果から，これらの密教法具の鋳造に関連する遺物は，いずれも平安後期のものと考えられる。

5　小　　結

今回の調査では江戸前期の土取り穴を検出した。本調査区の北約200ｍの74地点〔清水・吉野81〕や，北約60ｍの134地点では14世紀前葉～中葉ごろのもの〔五十川86〕を，また，約100ｍ南の154・155地点では18世紀の土取り穴を検出している〔五十川・浜崎89〕。本調査区で検出した土取り穴が17世紀後半の遺物を含むことから，京都大学構内では土の採取が，本調査区の北の医学部構内東北部から南半部へ，そして病院構内北半部へと移動していったことが判明した。なお，17世紀の地誌『蒐藝泥赴（つぎねふ）』には，寛文年間(1661～1673)に河の彦四郎なる男が熊野社のすぐ西で土を掘り，あきなっていたことが記されている。熊野社は本調査区の南約500ｍの地点にあたり，周辺の黒谷，岡崎とともにこの地一帯でさかんに土の採取がおこなわれていたことがわかる。

また，今回検出した土取り穴の形態は規則性をもたず，74・134地点の中世の土取り穴に似る。154・155地点の土取り穴が規模や方位に多少ながらも規格性をもち，組織的な土の採取がおこなわれていたことをうかがわせるのと大きく異なる。『立杭窯の研究』によれば，丹波多紀郡の立杭焼きの陶土は坪単位で売買され，この売買のため土取り穴は方形で規格性のあることが報告されている〔藪内55〕。本調査区の土取り穴と，154・155地点のものとの形態の相違が時期差によるものか，土地の権利関係や，土を採取する組織のあり

方によるものかなどの解明は今後の課題である。

また，平安後期のものと思われる鋳型，取瓶がまとまって出土したことは注目に値する。これらの鋳造に関する遺物が在地の工房の存在を示すものか，施主の注文に応じて出張して鋳造した一時的なものかは不明である。ただ，本調査区の周辺では111地点で平安中期の，142地点で鎌倉時代の鋳造に関連する遺構や遺物が発見されている。また，155地点でも時期は不明ながら，鋳型，坩堝，鞴の羽口が出土しており，京都大学の教養部，医学部，医学部附属病院の位置する吉田山西麓一帯は，古代・中世の鋳造にかかわる工人集団の本拠地のひとつであったと考えられている〔五十川88〕。また，前述のように黒谷，岡崎の土は陶土として有名であるが，諸国の特産物にまで言及した17世紀の俳論書『毛吹草』

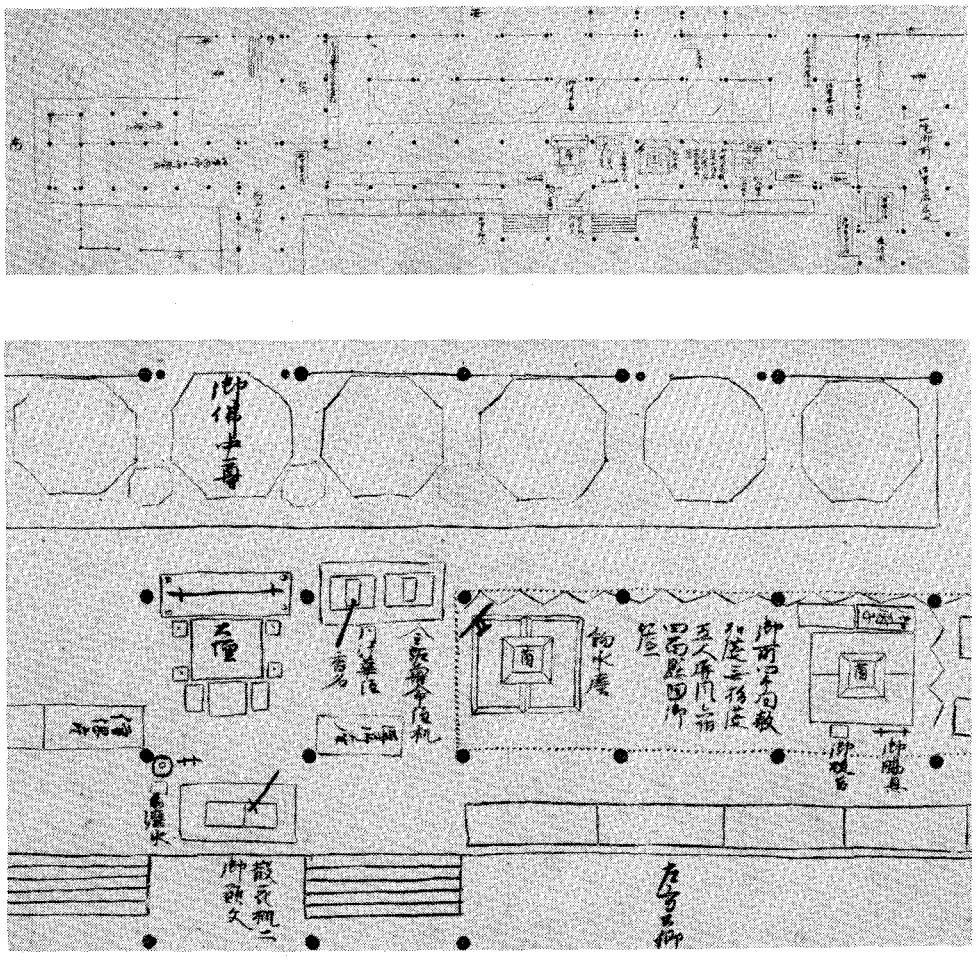

図10　福勝院の九躰阿弥陀堂（重要文化財『兵範記』京都大学附属図書館所蔵より）（下）は拡大図

には，黒谷の名産として，陶土と梵鐘の鋳型の型土をあげている。黒谷は本調査区の東南東約800ｍの地点にあたる。本調査区一帯で採取した土が鋳型の型土に適しているとすれば，工人集団が吉田山西麓一帯を本拠地にした理由もうなずける。

その一方，本調査区出土の鋳型の場合，平安後期のものであること，鋳造したものが密教法具であることから，本調査区のすぐ東に比定されている福勝院の注文を受け，その周辺で鋳造した遺物の可能性もある。平信範の日記『兵範記』の仁平２(1152)年８月28日の条に，鳥羽法皇の五十賀算を設けたときのことが記されている。この五十賀算は鳥羽法皇の皇后高陽院泰子の父である前太政大臣藤原忠実が，泰子の御願の御堂福勝院で設けたものである。この日の記事には宴の様子とともに，福勝院の九躰阿弥陀堂の詳細な平面図が記載されている(図10)。この九躰阿弥陀堂には丈六仏が供養されていたが，その中尊の前に方六尺，高さ一尺一寸，螺鈿地蒔の大壇が据えられていた。大壇の四角には鑁を立てて，五色の糸をひき，「四面備闕伽器盛造花」とある。六器はもともと闕伽器と称されていたが，火舎，飯食器，花瓶とともに，６口が１組で一面器をなすことから，六器と称されるようになった〔佐和・濱田84〕。４組の一面器を四面具として，大壇の４面を飾る。福勝院の場合も四面具を備え，六器には各面に６口ずつ，計24口ならべて用いられたと考えられる。このような，本調査区と福勝院の位置関係，鋳型の年代，鋳造製品の性格から，Ⅱ48～Ⅱ51の鋳型が福勝院で用いられた六器の可能性もある。

以上のような調査の成果により，医学部・病院構内一帯の中世から近世にかけての，土地利用の変遷と，工人集団の動向や福勝院についての貴重な資料を得ることができた。

なお，六器に関しては京都国立博物館の難波洋三氏，鋳型については京都市埋蔵文化財研究所の梅川光隆氏の御教示をいただいた。末筆ながら，お礼申し上げます。